

西方官衙南地区の調査

—第108-10次

1 はじめに

本調査は、藤原宮の南西に位置し、特別史跡に含まれる縄手池東岸の護岸整備に伴う調査である。過去の周辺の調査(第37次、第58-18次、第83-13次など)から、西面大垣、西面南門、西面外濠の存在が推定されたため、部分的に1～4区の調査区を設定した。総面積は225㎡、調査期間は2000年11月13日から29日までである。

池内の発掘作業は、排水不良により困難をきわめ、やむをえず、遺構の範囲確認を主眼とする調査となった。

基本層序は、1区東半が、上から池内堆積土である暗灰色粘質土、ベースとなる弥生時代中・後期の遺物を含む暗茶色粘質土、地山の青灰色粘質土の順である。一方、1区西半と2～4区は、池の掘削によって池内堆積土がかなり厚くなり、池底に淡灰色粗砂が溜まる。ベースである暗茶色粘質土は残っていなかった。

2 検出遺構

2区で外濠SD260、3区では瓦溜りSK9435を検出した。1区・4区では、西面南門、外濠、大垣は検出されなかった。今回の調査区に隣接する第96次調査でも遺構の残存状況は劣悪であることから、縄手池の造成により削平されたものとみられる。

SD260 2区で、西面大垣の外側に設けた外濠の東肩を確認した。深さ0.90m。埋土は、上層が暗灰色砂質土、下層は小石を多く含む灰褐色粗砂に暗茶褐色粘質土が部分的に混じる。埋土からは多数の土器と瓦が出土した。土器は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器があり、藤原宮期のベースである弥生時代包含層の土器のほか、藤原宮期から奈良時代を中心に、平安時代までおよぶ。こうした様相は、過去の西面外濠の調査(第34次、第37次)と共通している。瓦は、藤原宮所用軒平瓦6646 Baが1点出土した。

なお、外濠の東肩は、 $Y = -17,895.2 \sim -17,895.6$ と、推定ラインより東へ大きくずれるが、これまでの調査で、西面外濠は藤原宮廃絶後も水路として機能し、氾濫や水流による浸食で著しく拡大、変形していることがわかっている。今回検出した箇所も同様であろう。

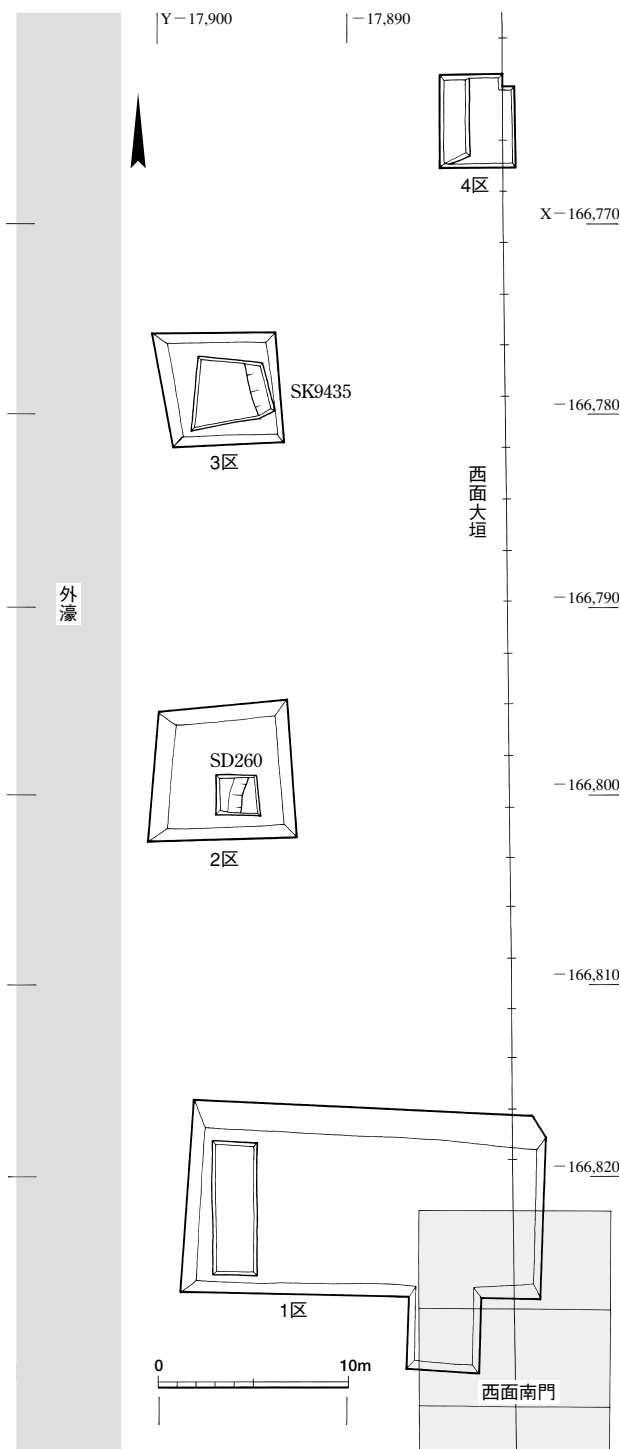


図65 第108-10次調査遺構図 1:400

SK9435 3区東端で、東へのびる土坑状の落ちを検出した。埋土は暗灰色粘質土で、完形に近い大量の瓦が出土している。軒丸瓦は6274 Bと6276 Eが各1点、軒平瓦は6647 Eが1点である。また藤原宮期の土器も出土した。瓦の出土状況や遺物の内容からみて、おそらく藤原宮廃絶に伴い、西面大垣に葺かれていた瓦を一括投棄した土坑と推定される。
(渡邊淳子)